

五井蘭洲「『中庸』天命性図」について

湯城 吉信

はじめに

本稿では、江戸時代の儒者五井蘭洲作「『中庸』天命性図」の復元を試み、その特徴を考察したい。同図は、図そのものは残されていないが、『蘭洲先生中庸天命性図解』の詳細な記述により復元が可能である。

五井蘭洲（一六九七～一七六二）は、江戸中期の大坂出身の儒者である。懷徳堂草創期に講義を担当するために招聘され、津輕藩に仕えた後、再び懷徳堂に戻り、懷徳堂学派を代表する学者となる中井竹山、履軒兄弟を弟子として育てた。以後の懷徳堂の学風の形成に大きな影響を与えた人物であると言える。懷徳堂を痛烈に批判した上田秋成も蘭洲だけはよい学者であったと評価している。^①

蘭洲の著作は、荻生徂徠を批判した『非物篇』、仏教を批判し儒教を称揚した『承聖篇』、『蘭洲茗話』などの雑記、『勢語通』などの和学の著作などがある。朱子学を尊奉していたが、祖述を宗とし自らまとまった著作は残さず、『蘭洲先生遺稿』^②に雑駁な文章が見える他、大量に残されているのは講義録及び筆記である（大阪府立中之島図書館に「五井蘭洲講義筆記六十五種」として所蔵^③）。上述の他学派批判の書は、晩年、中風に罹ってからの著作であり、自らの寿命を悟った後、斯

学を守るといふ使命感に駆られてようやく著したものである。蘭洲は学者である以前に教育者であり、平生は著作を残すことよりも講義に力を注いでいたのであろう。

さて、以上の大量に残された講義録及び筆記は、『易経紀聞』『論語解』『孟子筆記』『小学紀聞』『二程全書講義』など、儒教の経典や朱子学の文献を解説したものであり、その中から蘭洲の特徴を見出すことは困難である。ただ、目に見える特徴として、図解が多く用いられていることがある。

本稿では、これらの蘭洲の図を紹介し、その中、特に重要であると思われる「天人事物一貫之図」及び「『中庸』天命性図」の中、復元が可能な「『中庸』天命性図」の復元を試みる。さらに、この図と関係すると思われる図を紹介し、蘭洲の「『中庸』天命性図」の特徴を明らかにしたい。

一、蘭洲の教学における図の多用

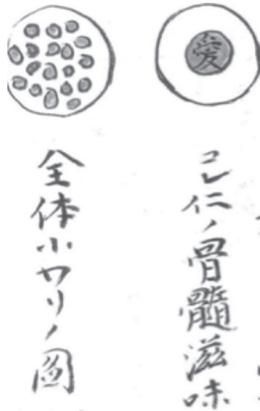
「はじめに」で述べたように、蘭洲の講義録・筆記にはしばしば図が見える。それらの中には、朱筆で彩色されたものもある。本章では、それらの一斑を紹介したい。以下、図の名称は湯城による仮称、数字は丁数、aは表、bは裏である。

① 魂魄図（『百一録』17a）〔図1〕

この図は、人の魂魄と精神の働きを図示したものである。蘭洲は、人の魂魄は、天地の鬼神に対応するもので、鬼が陰、神が陽であるのに対して、魂は陽、魄は陰であると言う。図の白黒はその陰陽を表している。そして、人の精神はこの魂魄が「屈伸往来」するものに他ならない。図の真中に、神∥陽、精∥陰としているのはその「屈伸往来」する様子を表したものである。



〔図1〕 魂魄図（『百一録』17a）



〔図3〕 仁之骨髓図（『鉤深録』13a）

* 円の中の塗りつぶしは朱色。



〔図2〕 満腔子仁図（『鉤深録』59a）

* 朱線が放射状に画かれている。

る（周敦頤「太極図」の「陽動陰靜」の部分参照されたい。神 \parallel 陽、精 \parallel 陰に固定化したものではない）。

② 満腔子仁図（『鉤深録』59a）〔図2〕

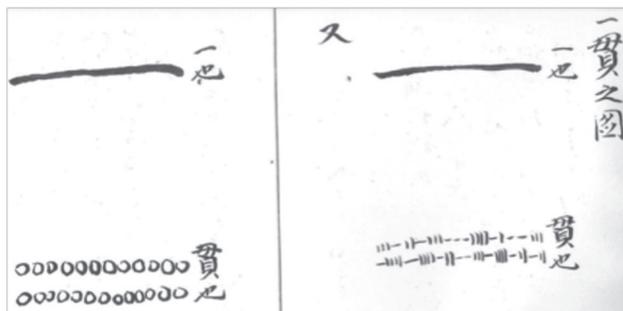
程明道に「満腔子是惻隱之心」という語がある（『二程遺書』卷三、『近思録』卷一）。満腔子は体全体という意味であり、その自らの体いっばいに充滿した惻隱の情を世の中に押し広げていく様子を表したのがこの図である。図では、中心の円から一番外の四角形の辺に向けて、朱色の線が十六本、放射状に描かれており、下に「朱ニテ引タル筋ハ皆恕也」とあるように、恕（思いやり）を広げていくのである。蘭洲は、仁を及ぼす範囲は、学者は「一家」、賢人は「一国」、聖人は「天下」であり、それぞれ、その範囲を意識することが重要であると言う。

③ 仁之骨髓図（『鉤深録』13a）〔図3〕

朱子は『論語』学而篇の「孝弟也者、其為仁之本与」に対して、「仁者愛之理、心之徳也」という注を付けており（『論語集注』）、朱子の高弟・黄幹は「愛之理」は「偏言」（狭義）、「心之徳」は「專言」（広義）と説明している（『勉齋集』卷十六）。だが、蘭洲は「愛之理」も「全体小割」で理解してはならないと考えてこのような図を表したのであろう。なお、この図も中は朱で色づけされている。



〔図5〕心図（『知新録』87a）



〔図4〕一貫図（『道学関轄録』6b～7a）

④ 一貫図（『道学関轄録』6b～7a）〔図4〕

理は、各事物に存在するが、大きく言えば一つであるという所謂「理一分殊」を説明したものである。『論語』里仁篇「子曰、参乎、吾道一以貫之。：曾子曰、夫子之道、忠恕而已矣」の朱子集注に「聖人之心、渾然一理、而泛应曲当、用各不同」（聖人の心は渾然と一理であり、ひろくすべての物に完璧に対応する）とある。「分殊」の部分は、右図と左図で違いがあり、それぞれ下に以下のような書き入れがある。

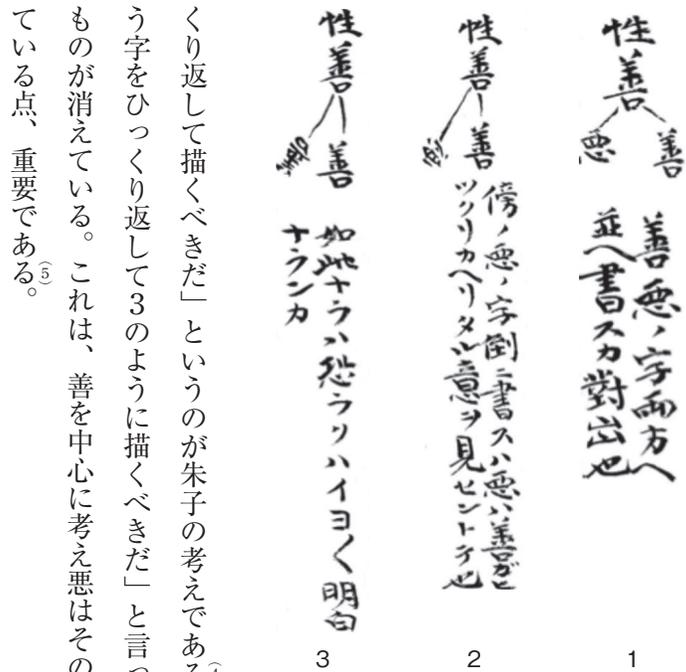
右…「豎二引モノ横ニ置バ一トナリ、又、横ヨリ見レバ一トナル。横ニ引モノ本来一也」（濁点は補った）

左…「此小圈図、豎ニ引ノバセバ豎ニ一トナリ、横ニ引ノバセバ横ニ一トナル」

つまり、「分殊」は右図のようにも左図のようにも描くことが可能で、どちらでも理屈が通じることを言っているのであろう。

⑤ 心図（『知新録』87a）〔図5〕

蘭洲は、儒教は完全な善である性に基づくのに対し、仏教は善悪合わせ持つ心をよりどころとする点を批判している（「仏氏本心不本天。其唯本心也、故其說出思慮運用。彼亦知悪之、遂欲滅思慮。思慮豈可滅乎。」（『蘭洲先生遺稿』上巻44a））。その心が清濁合わせ持つ様子を表した図である。張載の「心者統性情」を表したものだという説明がある。



〔図6〕性善図（『性論明備録』10b）

⑥ 性善図（『性論明備録』10b）〔図6〕

『朱子語類』卷九五に、弟子の正淳が郭氏性図について朱子に尋ねた記述がある。この部分は山崎闇斎『性論明備録』にも引かれており、蘭洲の発言が見えるのはその『性論明備録』の講義録の中である。1と2が朱子が考えをそのまま図示したものであり、3が蘭洲が改良を加えた図である。程明道の「悪亦不可不謂之性（悪も性だと言わざるを得ない）」を図示する場合に、「1のように善と悪とを同等に並列するのは間違っている、悪は善がひっくり返ったものなので、2のように字もひっくり返して描くべきだ」というのが朱子の考えである⁽⁴⁾。それに対して、蘭洲は、「それなら悪という字を使わずに、善という字をひっくり返して3のように描くべきだ」と言っているのである。この蘭洲の修正図においては、「悪」という字そのものが消えている。これは、善を中心に考え悪はその変態に過ぎないとする（悪を固定的に考えない）蘭洲の考えを反映している点、重要である⁽⁵⁾。

二、「太極図説」に対する評価

本章では、「太極図説」に対する蘭洲の理解を紹介したい。蘭洲は、「太極図説」を高く評価しつつも、修正も必要だと考えていた。

① 「太極図説」の目的・由来

蘭洲は「太極図説」が作られた目的について次のように言う。

太極図説何為而作也。蓋周子欲使人之為善也。即知非出造作、又非出聖人矯揉、皆所奉天命而行、不可已之道、所以敷演『中庸』所謂天命之性也。非区々一心之工夫矣。不知者徒視図為弄具、不知切諸身。程子曰、聖人之道本於天、是也。（『蘭洲先生遺稿』上卷 86 b - 87 a⁶）

「太極図説」が作られたのは、人々に善を行わせるためだというのである。道徳は、聖人が考え出した人為的なものではなく、自然法則に基づくものである。それがわかっていないと形式的に行うだけになってしまふ。そうならないように周敦頤はこのような図説を作ったというのである。そして、『中庸』に言う「天命之性」を敷衍したものだと言う。「太極図」はともすれば、抽象的、神秘的な図だと考えられるが、蘭洲は決してそうではないと考えていたのである。

「太極図」は、その神秘的表現のため、道家に由来するとも言われるが、蘭洲はそれも否定している。蘭洲は以下のように言う。

太極ノ図ハ宋ノ始ノ陳搏ノ輩道家ニ用ヒタリ。ソレヲ周子道ノ上ヘ用ヒテ図説ヲツクルトイヘリ。陳搏ハ周子ノトキイマダ存生ノ人也。然レバコノ太極ノ図ハ唐ノ末五代ノコロノ道ヲ知ル人ヒソカニ此図ヲツクリタルモノ也。然ルヲ陳搏ノ輩道家ノ事ニ仮リ用ルハ八卦ハ伏羲ノ作レヲ占方ヲシテ失セモノナドヲ占フ人ノ用ルヤウナルモノ也。（『雜纂』⁷下巻

50 b - 1）

周敦頤が使った「太極図」は直接には道家の陳搏らが用いていたものだが、それはもともと道を悟った儒者が作ったものだったというのである。つまり、儒家↓道家↓儒家と流伝したものであるものでもともと儒家のものだということである。

②「太極図」に対する疑義

ただ、蘭洲は今の「太極図」には誤りもあると考えていた。上記引用部分に続けて蘭洲は次のように言う。

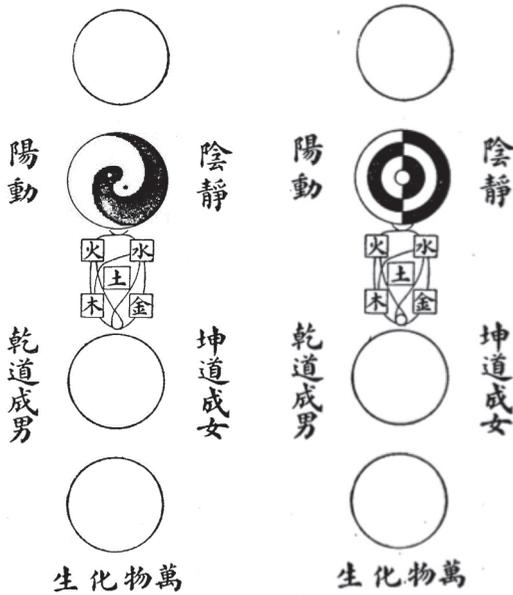
今、印本ノ陽動陰静ノ図ハ伝写ノ誤リアリ。今ノ陽動陰静ノ図ノ中ノ白圈ヲ太極トスレバ陰陽ヨリ太極生ズルヤウ也。今ノ陰静陽動ノ外マハリニ圈図アルベシ。其中ヘ陽動陰静ノ図ヲカキ入レタル也。外ノ圈図ハ太極也。カヤウニ図スレバ、太極陰陽ヲ生ズル意見ユル。（『雜纂』下巻50b）

つまり、今の「太極図」の上から二つ目の「陽動陰静」の部分は、真中の小さな白丸が太極だとすると、陰陽から太極が生じるように見える。本当は、太極から陰陽を生じるので、太極を表す円は中ではなく外周りにあるべきだと言うのである。さらに、蘭洲は次のように言う。

又、今ノ図ノ如ク陽動陰静ノ継目フトク截然ト分ルヤウニ図スル事ニ非ズ。動テ陽、静ニシテ陰トナル事、イツ動静スルトモ分レヌモノ也。故ニモトハ陽動陰静ノ継目ノ処ヲ細ク図シテ、イツノマニヤラ動静シテ、ハッキリト動静分レヌヤウノ意ヲ示シタルモノ也。：明ノ章潢ガ図書篇ノ中ニ古ノ陽動陰静ノ図アリ。此図持軒先生（*蘭洲の父）ノ口授スルイツ動静スルヤラ分ラヌト云処ノ模様ヲ図スルニヨクカナヘリ。今ノ印本ノ図ニハ遙ニマサレリト也。（同上）

今の「陽動陰静」の部分は、陰陽の継ぎ目がはっきりと分かれている。だが、本当は、陰陽は徐々にいつの間にか変化していくものなので、このようにはっきりとした継ぎ目ではなく、細くすべきだと言うのである。蘭洲は、明の章漢の『図書篇』の中の「古ノ陽動陰静ノ図」が今の図より優れると言う。『図書篇』の中に「古ノ陽動陰静ノ図」という名の図はないが、おそらくは「古太極図」（現在も道教のシンボルになっている白黒が渦巻いた「陰陽魚太極図」）を指すと思われる。さらに、上から三つ目の五行の部分については以下のように言う。

又五行ノ図ノ下ノ圈図モ今ノ図ノ如ク小二圈シテハ太極ガ別ニアルヤウ也。此圈図ハナキモヨシ。モシ圈図ヲ書スナラバ、大二圈スルガヨキト也。コレ持軒先生ノ口授也。(同上)



〔図7〕「太極図」

〔図8〕「蘭洲の考えた太極図」(湯城推測)

「五行ノ図ノ下ノ圈図」とは五行の部分の小円であろう。二つ目の部分同様、この部分も、このように描くと、五行と太極の関係が明らかではないので消した方がよい。ただ、もし、太極から五行が生まれることを表すためには、太極を表す円は小さく描くのではなく、外周りに大きく描くべきだと言うのである。

以上の蘭洲の考えを反映し、二つ目の「陽動陰静図」を今の太極図に入れ替え(その場合、外周りの円は要らないものと考ええる)、三つ目の「五行図」から下の白丸を取れば、おおよそ〔図8〕のようになるのではなからうか。

三、「天人事物一貫之図」と『中庸』天命性図

一章、二章では、蘭洲が図解を重視していたことを明らかにした。本章では、蘭洲にとって最も重要であったと思われる「天人事物一貫之図」と『中庸』天命性図について述べたい。

①「天人事物一貫之図」

蘭洲が「天人事物一貫之図」なる図を作っていたことは、『蘭洲先生遺稿』下巻に記述が残っていることからわかる。「太極図説」について二章で確認したような内容を述べた（注6の箇所）後に、蘭洲は以下のように言う。

欲知本天、幸此図（*「太極図」）有存焉。…今世頼有講程朱学者、唯争章句之末・議論之間、惜矣哉。余頃作天人事物一貫之図以示従遊者、庶幾有羽翼乎此図、亦懼識者有不自揣之訾爾。（『蘭洲先生遺稿』下巻2b1）

ここでは、人間の道徳が天に由来することを明らかにするものとして幸い「太極図」が残されていると言った後で、「天人事物一貫之図」なる図を作っていたことと、それは「太極図」の補助として、議論だけの学者ではなく心から納得して道徳実践できる人物を養成することを目的とするものだったことを述べている。

以上の記述から、この図に対する蘭洲の重視と自負が伺えよう。ただ、この図については『雜纂』下巻の中に断片的記述が残るに過ぎない。

孟子性善ト云ハ天人事物一貫之図ノ天（割注…陽陰）―道―善―人性ト人性ノ上ニアル善也。コレスナハチ繫辭ニ成性

ノ上ニアル繼善ノ善也。(『雜纂』下卷45a)

* 『易経』繫辞伝には「一陰一陽之謂道。繼之者善也。成之者性也」と見える。

また、この部分に関しては以下のような記述も見える。

天人事物一貫之図ニ道ノワキニ不对徳トアルハ、徳トイヘバハヤ人事ニワカル、此道ノ字一陰一陽之謂道ノ道ノ字ニテ、繼善成性ノ前ナレバ：(『雜纂』下卷47a)

この二つの記述を総合すると、この図の一部は

天 陽
陰 — 道 — 善 — 人性
不对徳

となっていたことがわかる⁽⁸⁾。

その他、天人事物一貫之図の様子を窺うことのできる記述として以下の箇所が挙げられる。

先生天人事物一貫之図ニ仁ノ筋ノ処ニ愛孝温和慈恵之属ト云、義ノ筋ノ処ニ敬忠廉潔果敢之属ト云テ、仁義ノ下ニバカリカヤウノ辞ヲ加ヘルハ繫辞ノ意ヲ含テノ意也。愛孝ハ親ニ愛ヲスレバ孝トナリ、敬忠ハ君ヲ敬スレバ忠トナルヲ云

也。〔割注〕此図天人事物一貫之図不改前ノ図ニツキテ云説也。（『雜纂』下卷44 a - 44 b）

ここを見ると、蘭洲は『易経』などを参考にこの図を作り、その一部分は

仁―愛孝温和慈恵之属

義―敬忠廉潔果敢之属

となっていたことがわかる。ただし、これは改正前の図だという注記があり、改訂を加えていたことも窺える。また、以下のような記述もある。

天人事物一貫之図ニ情ノ処ニ感而動ト云、意ノ処ニ感而応ト云テ、動ト応トニテ分タリ。感而動ハ俗ニマニハツトイレヌト云如ク、少シモユトリナク性ヨリ直ニ発スヲ云。故ニ情ニツクル也。感而応ハ少シユトリアリテ差別アル也。譬バ貴人呼ベバ答フレドモアイト云。目下ノ人呼ベバ直ニ答フトイヘドモヲウト云類ナリ。故ニ意ニツクル也。ココヲ以テ情ト意トノ別ヲ知ルベシ。（『雜纂』下卷45 a - b）

* 「マニハツトイレヌ」は「間髪入れず」。

この記述によれば、「天人事物一貫之図」には以下のような部分があったことがわかる。

情―感而動

意—感而応

以上のような断片的記述と再現可能な部分および図の名称から推測できるのは、この図が、人間の道徳は天地の自然の摂理の一部を為す（そこに由来する）絶対的真理であり、また、事物についてもその対応関係を指摘できることを表したものであったであろうことである。蘭洲は、『易経』繫辞伝などを参考にこの図を作り、教学上非常に重視していた。この図の全体像が明らかにできないのは非常に残念である。



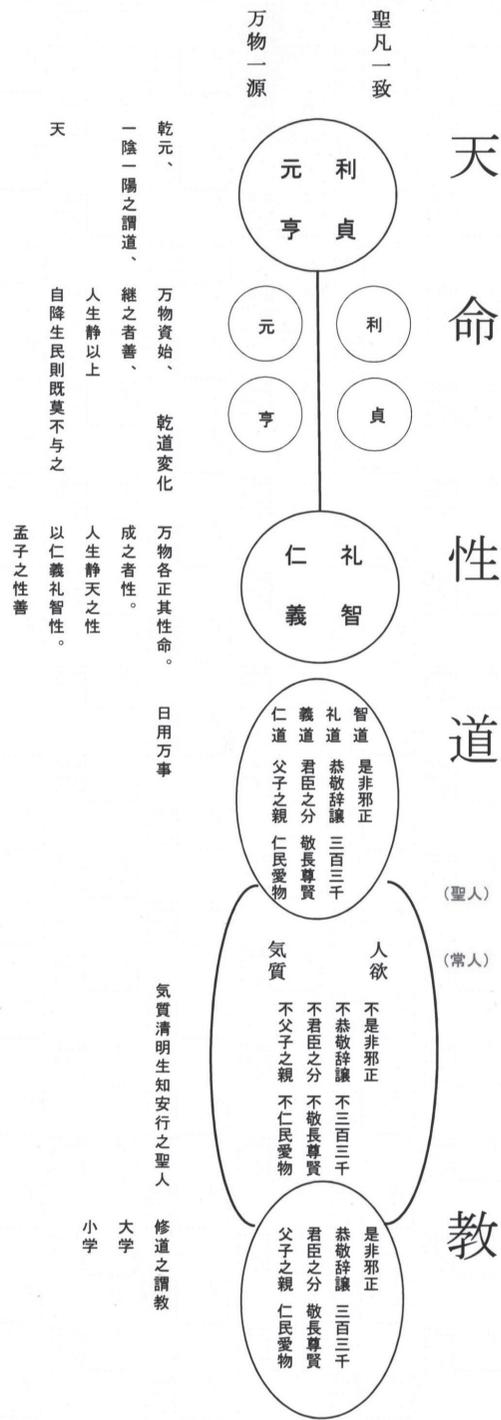
〔図9〕『蘭洲先生中庸天命性図解』冒頭

② 「『中庸』天命性図」

次に、本稿の中心である「『中庸』天命性図」について述べたい。この図は、『蘭洲先生中庸天命性図解』という著作に実に詳細にその様子が述べられており、復元が可能である。四葉ほどの短い文章で、この文章と対照しなければ、筆者の図の復元の当否も判断することができないので、附録に全文を挙げる。

この記述に基づき、筆者が復元した図は以下のようである〔図10〕。

* 右下部の「(聖人) (常人)」は湯城による補足。



〔図 10〕 蘭洲先生『中庸』天命性図（湯城復元）

この図は、上から下に、天から賦与された道徳が人に実践される過程を表している。

図の右に大きな字で書かれている「天」「命」「性」「道」「教」は、言うまでもなく、『中庸』冒頭の「天命之謂性、率性之謂道、修道之謂教」を表している。

図の左の文言は、関係する経書の文言が、「天」「命」「性」「道」「教」のどの範疇に属するかわかるように区切って書かれている。右から、「乾元…」は『易経』乾卦象伝、「一陰一陽…」は『易経』繫辞上傳、「人生静以上…」は『礼記』楽記篇（朱子学でよく引用される）、「天自降生民…」は朱子『大学章句』序の引用（見やすくするため句読点を補った）である（句読点は湯城による）。

次に中央にある図について説明する。

まず、図の上半分「天」「命」「性」の部分は、天徳である「元」「亨」「利」「貞」が人に賦与される様子を表している。○という図形は渾然一体となっている様を表し（附録注3参照）、「元亨利貞」の○と「仁義礼智」の○を結ぶ縦棒は、人の性が天から稟けて天と一致することを表している。「元亨利貞」は、『中庸』ではなく『易経』乾卦卦辞に見え、朱子学ではこれを天徳とする。蘭洲の説明によれば、「元」は万物を生む春の徳（人では「仁」）、「亨」は万物を成長させる夏の徳（人では「利」）、「貞」は実りを生む秋の徳（人では「義」）、「貞」は来年の準備をする冬の徳（人では「智」）である（附録注4参照）。なお、最上部の「万物一源」「聖凡一致」は、管見の及ぶ限り経書では発見できなかったが、宋学では一般的に用いられることばであった（附録注1、2参照）。

続いて、図の下半分「道」「教」の部分について説明する。この部分は、天から「仁義礼智」の徳を授かった人がいかにそれを実践するかを描いている。「道」の○には「仁義礼智」の徳が実際にどのような行いとなるかが書かれている。

さて、聖人はこの「道」だけで済むのだが、凡人は人欲があるために、「教」を用いざるを得ない（図に書いている「（聖人）（常人）」は、この聖凡の分かれ目を示すための湯城による挿入である）。ただ、この「教」を全うすれば道に返ることができる。「道」の○（楕円）と「教」の○（楕円）が重なり合うよう合同に描かれているのはそのためである。左右の弧はその反復一致の様子を表している（台湾・明道大学の黒田秀教氏のご教示による）。「教」の内容については、図の左には「大学」「小学」だけが書かれているが、以下に説明する『中庸首章解』では、「聖賢の教え（直接の教授）」「天地万物の様子を見て我が身を省みること（自省）」「書物や伝聞で古人の嘉言善行を知りそれに習うこと（書物）」「悪い例を見て自己反省する（反面教師）」「人主が礼楽刑政で人民を教化すること（人民教化）」と、より多角的に述べている（『中庸首章解』13a）。

なお、この下半分では、「父子之親」→「是非邪正」という文句が繰り返し返し出てくる（『蘭洲先生中庸天命性図解』の説明でも同様である）。あるいは、門人に覚えさせるために繰り返し唱えさせていたのかもしれない。

また、これだけの図を実際に描くと相当の大きさ（高さ）になったであろう。おそらくは、掛け軸（掛け図）にして、門人に見せていたのではなからうか。

以上のように見れば、この図は単に『中庸』の説明をするためだけのものではなく、他の経書も取り込んで、儒教の教え（道徳実践）を人に総合的かつわかりやすく説明するためのものだったことがわかるであろう。

ちなみに、蘭洲に『中庸首章解』という著作がある。漢文を解しない庶民のために、和文で『中庸』首章を解説したもので、丁寧にふりがな、読点が付けられている。

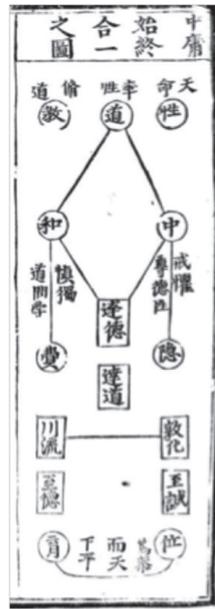
一般に『中庸』は抽象的で初学者向けではないと考えられている（序でも言う）が、蘭洲は天人一貫の理―すなわち、道徳は天に基づく自然法則とも言うべきもの（絶対的なもの）であること―を悟ることがいばん大切だと考えていた。そうでないと人々に道徳を行う根拠を納得させることができないし、道徳を行ってもただ表面的に行うだけに終わると考えていたからである。『中庸』については、懷徳堂学派では、中庸錯簡説が有名であるが、そのような学術的観点以外に、教学的観点から重視されていたことがわからう。以上のような執筆意図において、『中庸首章解』は「『中庸』天命性図」と通じるものであり、「『中庸』天命性図」の参考書として役に立つ。『懷徳堂研究』七号（大阪大学・懷徳堂研究センター、二〇一六年）に翻刻を發表するので参照されたい。¹⁰

五、他書における『中庸』関係図

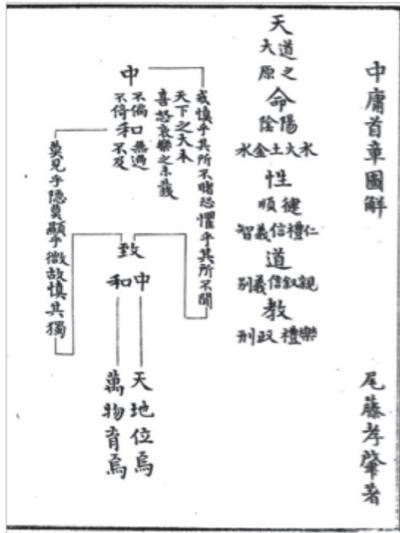
本章では、他書に見える『中庸』関係図を参考に、蘭洲の「『中庸』天命性図」の特徴を考えたい。

『中庸』は系統的に論述されている（少なくとも朱子学ではそう考えている）ため、本来、図示しやすい。加えて、『中

『中庸』の朱子学における重要性、その深遠さ（理解しにくさ）を考えれば、蘭洲以外に、『中庸』を図示してわかりやすくしようという試みは恐らく数限りなくされてきたであろうと想像できる。以下、そのような中から、筆者が目にしたものをいくつか紹介する。



〔図 11〕 中庸始終合一之図
（『四書略図解』）



〔図 12〕 尾藤二洲「中庸首章図解」（安永八年
（一七七九）、天明五年（一七八五）訂）

中国でも日本でも、四書、五経を図解する本は数多く存在する。その中、『四書略図解』（大原武清『四書引蒙略図解』（承応二年（一六五三））という本の中に「中庸始終合一之図」と題する図が見える〔図 11〕。

また、蘭洲の図より後のものになるが、懷徳堂の中井履軒なども交流のあった尾藤二洲が『中庸』に関係するいくつかの図を残している^①。そのうち、『中庸』首章については、「中庸首章図解」がある〔図 12〕。

以上の二図は、いずれも『中庸』に見えるキーワードの相互関係を図示したもので、特に図 12 は、『中庸』首章の「天」「命」「性」の係性を示しており、蘭洲の図と類似を指摘できる。ただ、両者はいずれも用語の関係を示すだけのものであるのに対し、蘭洲の『中庸』天命性図は、①「太極図」と同じく生成の過程も図示する点（すでに述べたように、線や円も



〔図13〕元亨利貞図（『玉講附録』上巻）

その意味がある）、②他の經典の文言との対応性も示す点（左の文字部分）において特徴がある。蘭洲の図はより総合的な図だということである。

この生成を表すという点について類似するものとして、『玉講附録』上巻に見える「元亨利貞図」が挙げられる（図13）。

『玉山講義』は朱子が自らの思想を簡潔にまとめたものとして、後世、朱子学者の間で重視された。その『玉山講義』に山崎闇斎が『朱子語類』などからの引用を付け加えたのが『玉講附録』である（この図の部分も『朱子語類』に見える）。そして、蘭洲の講義録の中に『玉講附録紀聞』があることから、蘭洲が『玉講附録』を講義に使っていたことが確認できる。つまり、図13を蘭洲が目にしたことは確かである。

この「元亨利貞図」は、『朱子語類』卷九四「周子之書」「太極図」からの引用であり、「太極図」に元亨利貞を当てはめるとよくわかるといえるのが趣旨である。この図は、「太極図」の上部に対応するものなので当然、生成過程を示す図であり、さらに「元亨利貞」の天徳を最上部に置く点においても蘭洲の図と類似性が認められる。特に、『中庸』首章には見えない「元亨利貞」が見える点は注目に値する。すでに述べたように「元亨利貞」が天徳だというのは『易経』に基づき朱子学一般的な理解であるが、この両図における一致は注目すべきであろう。

以上のことからすると、蘭洲の「『中庸』天命性図」は、『玉講附録』「元亨利貞図」の影響を受けた可能性が考えられる。

おわりに

以上、本稿では、蘭洲の教学上の特徴として図を多用していることを指摘し、その中でも特に重要であると思われる「中庸」天命性図」の復元を試み、その特徴の分析を試みた。

同図の最大の目的は、人間の道徳が天に由来する自然の摂理であることを人々にわからせることにある。同図は単に『中庸』の文句を図解しているだけでなく、「太極図」と同様、天人合一の過程を生成論的に図示している点に特徴がある。また、経書に見える記述を附記しその対応関係も示しており、儒教の教義を集約して人々にわかりやすく示したものであると言える。

また、関連する著作として『中庸首章解』がある。これは一般に抽象的で難易度が高いとされる『中庸』の内容を、漢文を解しない人々にわかりやすく和文で解説した書である。

懐徳堂学派の『中庸』研究については、「誠」が唐突に一度だけ出てくる第十六章を第二十四章の後に置くべきだとする中庸錯簡説が有名である。ただ、本稿で明らかにしたように、教学の面からも重視されていた点は注目すべきであろう。¹²⁾

【注】

- (1) 『胆大小心録』二六「段々世がかわって、五井先生といふがよい儒者じゃあって、今の竹山、履軒は、このしたての禿じゃ。」(『上田秋成全集』第九卷、中央公論社、一九九二年、一四七頁)。
- (2) 『蘭洲遺稿』は大阪府立中之島図書館に三本所蔵されているが、本稿では『蘭洲先生遺稿』(741/720)を使う(丁数は同本による)。
- (3) 拙稿「大阪府立中之島図書館所蔵懐徳堂関係資料目録」(『中国研究集刊』三七号、大阪大学中国学会、二〇〇五年)参照。以下、本稿で扱う『蘭洲先生遺稿』『雑纂』『中庸天命性図解』『中庸首章解』『百一録』『鉤深録』『道学関轄録』『知新録』『性論明備録』『感興詩講義』『中庸輯略講義』『易四伝講義』『感興詩講義』『大学講義』などはいずれも〔五井蘭洲講義筆記六十五種〕の一つ。

- (4) 原文は以下のようである。
- 1 「性善字且做在上、其下不当同以善惡対出于下。」
 - 2 「不得已時、善字下再写一善、却傍出一惡字倒著、以見惡只是反於善。」
- (5) その他、蘭洲の講義録に見える図は以下のようなものがある（図の名称は仮に湯城がつけたもの、数字は丁数、aは表、bは裏）。
- ・己欲立而立人已欲達而達人図（『鉤深録』7b～8a）
 - ・動心図（『鉤深録』14b）
 - ・仁義礼智図（『鉤深録』22b）
 - ・舜蹠之分図（『鉤深録』40a 尽心上篇）
 - ・易理数図（『鉤深録』43a）
 - ・感興詩首尾図（『感興詩講義』47a）
 - ・穀種図（『百一録』18b）
 - ・統体大極図（『知新録』25b）
 - ・愛之理図（『知新録』64a）
 - ・未発已発中図（『中庸輯略講義』上49ab）
 - ・継善成性図（『易四伝講義』16a）
 - ・感興詩講義末尾図（『感興詩講義』末尾）
 - ・大学首尾図（『大学講義』100a）
- (6) その他、以下の箇所でも同様の内容を述べる。
- 「太極図説：蓋性与天道之奧不可拳舌明之也、権図以示之。：夫学不知本天、則仁義忠孝皆為格套、心術良智皆為煮空鑪、与義外善偽之説同致。苟知本天、則知仁義忠孝人之所以為人之道不容已矣、心術良智皆為率性。程子明觀之、乃言異端本於心、我道本於天、豈不然乎。欲知本天、幸此図有存焉。：今世頼有講程朱学者、唯争章句之末・議論之間、惜矣哉。」（『蘭洲先生遺稿』下卷2b）
- (7) 大阪府立中之島図書館には、二種類の蘭洲著『雜纂』がある（分類番号041/422および041/454）。本稿で引用するのはすべて前者（041/422）である（後者041/454は日本のことについて述べた文章を集める）。
- (8) この部分については以下の説明がある。
- 「天人事物一貫之図ノ道ト云ハ繫辞ニ一陰一陽之謂道トアルユヘ道ノ字出ルマデニテ、此道一陰一陽之謂道ノ道ナレバ天ニツキタル道ニテ人ノ上ヘハカカラズ。然レバ人ノ上ニカカル根本ハ一貫之図ノ道ノ下ニアル善也。コノ善ヨリ万ヲ推出来ル也。繫辞ノ意モコノトホリノ意也。」（『雜纂』下卷45a）
- (9) 筆者がどう復元するか迷った部分は以下のようである。

① 「元亨利貞」「仁義礼智」などは左右逆かもしれない。ただ、左右どちらでも意味上問題ないと判断し、今の我々にわかりやすいように左から右に読めるようにした。

② 「命」の小円は元亨利貞それぞれ四つに分ける可能性も考えられる。原文を見ると二つ描いてそれぞれに元亨利貞を書き入れるというふうにも取れるか。ただ、ここでは五章で紹介する『玉山講義』に見える「元亨利貞図」も参考に図のように表した。

③ 末尾部分「氣質清明 修道之謂教」が右か（天命性道教は『中庸』の文句に従うもの）左かも記述からは判断できない（他のコメントは左、「大学・小学」の横にある方がいいか）。

④ 「道」の円と「教」の円を「反復一致セル」ように描く方法。

(10) 以下、『中庸首章解』の序と跋から重要な箇所だけ挙げる。(一)内は振り仮名を適宜採用した。

序
「それ道は二端（ふたつ）なし。孝弟忠信、礼楽射御のたぐひ、皆これ道の本源より出づ。これを人事（わざごと）なりと蔑視（かろんじ）し、別に心法ありなど思ふは、道の一貫なるをしらざるなり。道の本源は天にあり。人の本源は性にあり。∴『中庸』一篇は、ただ是性命一貫の旨を説述られたり。∴ある人いふ、此『中庸』の書は、性命の理（ことわり）を説たれば、初学のしる所にあらず。これを論ずるは、等（しな）をこゆるとて、先儒のいましむる所なり。ただ小学より入べし。これ一往はことわりなれど、時をしらぬなり。∴然れば、『中庸』の書を見て、大やう天道性命といふことを見聞し、人道の本はここにあり、かの朦朧恍惚たることにあらず、目にふるる物、皆実理なりといふ事をしらせ置べし。∴たとへば、弓を射るもの、容貌（かたち）射方（るかた）の礼法にかなふべきは本よりのことにて、的のあり所をしらざれば、目をつくる所なきが如し。初学者に、先性命の理の的を、一目見せをくべし。然らば、他岐旁経（左）わきみち）のまよひなく、人倫の道に純一（もつぱら）なるべし。∴」

(11) 尾藤二洲（二七四七〜一八一三）。残している図の名称は、「中庸首章図解」「中庸知仁勇図解」「中庸章図」「中庸廿七章大小相資首尾相応図」（『中庸首章發蒙図解』・『与樂園叢書』巻一所収）。頼惟勤「尾藤二洲について」（『徂徠学派』（岩波書店）日本思想大系三七）、一九七二年）所収、五四一頁）によれば、古賀精里と共同討議の上完成したという。

なお、江戸時代の儒者では、中江藤樹（一六〇八〜一六四八）と三浦梅園（一七二三〜一七八九）も多くの図を残している。また、朝鮮

朱子学でも、有名な李退溪の「聖学十図」「天命旧図」「天命新図」の他、金謹行『中庸筭疑』、白鳳来『中庸通理』、金相進『中庸経義・中庸鬼神章筭録』、朴箕寧『中庸図説』などに『中庸』の図が見える。これらと蘭洲の図の比較は今後の課題にしたい。

(12) 中村春作「懷徳堂学派の中庸論」(市來津由彦、中村春作、田尻祐一郎、前田勉編『江戸時代の中庸注釈』(汲古書院、二〇一二年)所収)でも、蘭洲の『中庸天命性図解』や『中庸首章解』は紹介されていない。

〔附録〕

『蘭洲先生中庸天命性図解』(大阪府立中之島図書館蔵)

*句読点、濁点、『』(書名符号)、「」(引用符号)は補った。

〔天〕〔命〕〔性〕〔道〕なども湯城による補足。下線(図示に迷う部分)も湯城による。

〔原文〕

「万物一源」^①ト「聖凡一致」^②トヲ左右ニワリテ第一ニ書スルハ本源根本ヲ云。

〔天〕大円子ヲ書シ其中ニ「元亨利貞」^③ト書スハ、天ノ四徳也。此図及ビ此図ノ左ニ「乾元」「一陰一陽之謂道」^④「天」ト書スルハ、皆天ニ属スユヘ、此図ノ右ニ大ニ「天」ト書スルニ並ベツラネテ「天」ト照ジ合ス。左方ノ小ニ「天」ト書スルハ、朱子『大学』ノ序ニ、「天自降生民則既莫不与之仁義礼智性」ト云語ノ中ニテ「天」ノ一字ヲヌキ出シ、此図ノ右ノ方ニ「天」ト書スルニ並ベツラヌル也。

〔命〕次ニ、小円子ヲ書シテ其中ニ又小ニ「元亨利貞」ト書スハ、天ヨリ此四徳ヲ人ニ賦予シテ天ノ四徳仁義礼智ト名ノカハル処ノ界分・命ヲ示スユヘニ、再小円子ヲ書シ中ニ又小ニ「元亨利貞」ト書シ、此図ノ右ノ方ニ大ニ「命」ノ字ヲ書スルニ並ベツラネテ「命」ノ字ト照シ合ス。命ハ元亨利貞トイヘバ天ニ属シ、性トイヘバ人ニ属ス。天アタヘ人稟ル処ノ界分ツギメノ処ヲ命ト云。命ハ天ト人トノ間ニアリ。此図ノ左ノ方ノ「万物資始」⁶「継之者善」「人生静以上」「自降生民則既莫不与之」ハ、各天アタヘ人稟ルツギメ界分ノ処・命ヲ説語ユヘ、此図ノ右ノ方ノ大ニ「命」ト書スルニ並ベツラヌ。「自降生民則既莫不与之」ハ『大学』ノ序ノ此句バカリ命ノ時ニアタルユヘヌキ出シ挙ル也。

〔性〕次ニ、大円子ヲ書シ其中ニ「仁義礼智」ト書スルハ、既天ノ四徳ヲ人ニ稟テ性トナリ、天ノ四徳、仁義礼智ト名ノカハリタル後ヲ示ス図也。ユヘニ此図ノ右ノ方ノ大ニ「性」ト書スルニ並ベツラネテ「性」ト照シ合ス。上ノ大円子ノ中ニ四徳ヲ書ス図ヨリ次ノ小円子ノ中ニ又四徳ヲ書ス図及ビ此大円子ノ中ニ仁義礼智ヲ書ス図マデニ一筋豎ニ貫キタル筋ヲ引ハ、人ノ性、天ニ稟テ天ト一致ナル旨ヲ示ス也。此図ノ左ノ方ニ「万物各正其性命」「成之者性」「人生静天之性」「以仁義礼智性」「子孟子之性善」ト並ベ書スハ、各天ノ四徳ヲ人ニ稟テ性トナリ仁義礼智トナリタル上ノ意ヲ説語ユヘ、又此図ノ右ノ方ノ大ニ書スル「性」ノ字ニ並ベツラヌ。又此各ノ語ヨリアゲテ別ニ「乾道変化」ト書スニ意アリ。乾道ハ即元亨利貞ノ天道ソレガ変化シテ万物ノ性命トナルヲ云ユヘニ、此四字ヲ分テハ、乾道ハ天ニ属シ、変化ハ性ニ属ス。然ルニ「乾道変化」トツツケ見ルトキ、天ノ四徳ノ変化シテ仁義礼智ノ性トナラントスル際ユヘ命ニ属ス。「乾道変化」ハ譬バ「鳩化爲鷹」⁷ノ「化」ト「為」ノ二字ノ間ノ如シ。「鳩」ハ元亨利貞、「鷹」ハ仁義礼智、彼ガ此ニ変化シテナリカハル天人ノ際ヲ云。「乾道変化」ハ先大分ハ命ノ部ニテ精密ノ分別ハ命ヨリ下ニ属シテ皆虚⁸字也。サナケレバ「資始」ニ重言トナルユヘニ、「乾道変化」ヲ別ニ書シテ此意ヲ示ス。是故ニ、『易』ニ「大哉乾元万物資始」ト「万物各正其性命」ニテスミテアルニ、又「乾道変化」ト説モ此深意アルユヘ也。然レバ、此図「乾道変化」ヲ「命」ノ字ノ並ビニツラネズシテ、「命」ノ字

ノ並ビト「性」ノ字ノ並ビトノ間ニ別ニ書スハ、『易』ノ深意ヲ知ル人ナキユヘ其深意ヲ喻サントテ格別ニ掲ゲ書セラレタリ。

〔道〕次ニ、大円子ヲ書シ、其中ニ「仁道、義道、礼道、智道」ト並ベ書シ、仁道ノ下ニ「父子之親、仁民愛物」ト書シ、「義道」ノ下ニ「君臣之分、敬長尊賢」ト書シ、「礼道」ノ下ニ「恭敬辞讓、三百三千」⁹⁾ト書シ、「智道」ノ下ニ「是非邪正」ト書スハ、天ノ四徳ヲ人ニ稟テ性トナリ、性ノ理日用事物ニ行ハル処ヲ示スユヘニ此図ノ右ノ方ニ大ニ「道」ト書スルニ並ベツラス。此図ノ左ノ方ニ「日用万事」¹⁰⁾ト書スハ、日用万事ハ性ノアラハレテ道ノ行ハル処ユヘ（*「道ニ属スレバ」を見せ消ち）、又此図ノ右ノ方ニ大ニ書スル「道」ノ字ニ並ベツラス。

〔氣質・人欲〕次ニ、「氣質、人欲」ト並ベ書シ、其下ニ「¹¹⁾不父子之親、不仁民愛物」「不君臣之分、不敬長尊賢」「不恭敬辞讓、不三百三千」「不是非邪正」ト各又並ベ書スハ、天ノ四徳ヲ稟テ仁義礼智ノ性ヲ生レツク人ナレドモ此氣質ト人欲ニ乱サレテ如此ナル処ヲ示ス也。然ルニ唯聖人而已、此上ノ大円子ノ中ニ「仁道、義道、礼道、智道」ト書シ其下ニ「父子之親、仁民愛物」「君臣之分、敬長尊賢」「恭敬辞讓、三百三千」「是非邪正」ト書ス図ニ自然ト一生涯止リテ氣質人欲ニ乱サレネバ、此「氣質、人欲」ト並ベ書ス下ニ又並ベ書ス條々ノ事ナシ。コレ聖人氣質清明ニシテ一毫ノ人欲ナキユヘ也。賢者ヨリ常人マデハ大小多寡ノ違ハアレドモ氣質人欲ニ乱サルユヘ、此「氣質、人欲」ト並ベ書ス下ニ又並ベ書ス條々ヲ不免也。

〔教〕次ニ、大円子ヲ書シ、其中ニ「父子之親、仁民愛物」「君臣之分、敬長尊賢」「恭敬辞讓、三百三千」「是非邪正」ト並ベ書スハ、上ニ並ベ書ス氣質人欲ニ乱サレテ或ハ本然ノ性ヲクモラシ又ハ本然ノ性ヲ失フヲ、教ニヨツテ本ノ本然ノ性ニ復ス意ヲ示スユヘニ、此図ノ右ノ方ニ大ニ書スル「教」ノ字ニ並ベツラネテ「教」ト照シ合ス。此図ノ左ノ方ニ「大学、小

学¹²」ト並ベ書スルハ、其教ハ大小ノ学ヲ以テ教ルユヘ、又此図ノ右ノ方ニ大ニ書スル「教」ノ字ニ並ベツラヌ。「修道之謂教」ト書ス上ニ「氣質清明云々」ト書スルハ、此大学小学ノ教ハ「氣質清明中和生知安行¹³之聖人¹⁴」ノ立ル処ト云ヲコトハル也。

道ノ円子ト教ノ円子ト反復一致ニ図セル事、コレ所謂「舜有天下而不与焉¹⁵」ノ妙ヲアラハセリ。

詩云、「他人有心、我忖度之」、斯之謂也。

注

(1) 万物一源 『正蒙』卷六「誠明篇」に「性者万物之一源、非有我之得私也」とある。他、『朱子語類』卷九十八、宋・真徳秀『西山読書記』卷二、宋・黄震『黄氏日抄』卷三十三などにも見える。

(2) 聖凡一致 管見の及ぶ限り、清・陸隴其纂輯『四書講義困勉録』卷三十四(告子上)に「仁義有善無惡、固縁情可驗而聖凡一致者也」とあっただけである。

(3) 大円子 円について蘭洲『感興詩講義』5aに「渾然ハ円ニシテ無端辞也」とある。また、『中庸首章解』25bに「中の字は、：篆文(こもじ)はゆなり。○は宇宙の象(かたどり)なり」と見える。

(4) 元亨利貞 『易経』乾卦卦辞に見える。文言伝に「元者善之長也。亨者嘉之会也。利者義之和也。貞者事之幹也」とあり、朱子本義は「元、大也。亨、通也。利、宜也。貞、正而固也。文王以為乾道大通而至正」と言う。元亨利貞が天の徳であることについては、朱子「小学題辞」に「元亨利貞、天道之常」とある他、乾卦文言伝孔疏に「但乾卦象天、故以此四徳皆為天徳」と見える。また、蘭洲『玉講附録紀聞』中卷(山崎闇斎『玉山講義附録』の講義録)に「(*元亨利貞は陰陽両者に渉るものになぜ乾だけに言うのかという問いに対して)乾ハ陽ニシテ君子ニアタレリ。君子ノ大徳天ニ伴シキヲ乾卦ニ明ス。此四字、元亨、陽、利貞、陰ナレドモ、陰中ノ陽、陽中ノ陰ニテ、独陰独陽ナキヲ示ス」とある。また同書、5aに以下のような対照が述べられる。

元 春 万物發生(生む) 仁
 亨 夏 万物暢茂(そろう) 礼
 利 秋 実りを生む 義

- 貞冬 幹が来年の準備をする 智
- (5) 一陰一陽之謂道 蘭洲はこの文句の意味を世の中のすべてのことが陰陽に当てはまるといふ意味だと考えていたようだ。蘭洲『中庸首章解』11aに「よろづのもの、此めおの外にもる物なし。ゆへに易に一陰一陽之謂道と見えたり」と言う。
- (6) 万物資始 とりてはじむ。蘭洲『知新録』24b-25aに「資トハ何ヲ資ナレバ統体ノ太極ヲ資也。資テ後各具ノ太極トナレリ。資ハ理バカリヲ資也。始ハ理気ヲ兼テ」と見える。また、蘭洲『知新録』28bに「万物資始ハ、資ハ理、始ハ気也」と見える。
- (7) 鳩化為鷹 『礼記』王制篇に「鳩化為鷹、然後設_レ羅」と見える。孔穎達の疏は「謂八月時：以「月令」二月時鷹化為鳩、則八月鳩化為鷹」と説明する。
- (8) 虚字 蘭洲は実際の意味がある字を実字、実際には意味があまりない字を虚字（および客字）と呼んでいる。蘭洲『玉山附録紀聞』中巻1aに「亨利ハ虚字ニテ客字、元貞ガ実字ニシテ主トナレリ」、蘭洲『中庸講義』73bに「虚文ハ文アリテ用ヒラズヤクニタタヌラ虚文ト云」とある。
- (9) 三百三千 礼の多いこと。『中庸』第二十七章に「礼儀三百威儀三千」とある。蘭洲『玉講附録紀聞』中巻5bにも「礼義三百威儀三千」とある。他、『礼記』礼器篇に「経礼三百、曲礼三千」とある。
- (10) 日用万事 『易経』繫辞上伝に「百姓日用而不知」と見える。蘭洲『中庸首章解』7aでは「世に一丁字（いちもじ）をしらぬ常人（なみなみのひと）に、こころだてすなをに、行ひのよく、君子にほめらるる人あり。これいまだ道をきかざれど、其性はもと天と一体なるにより、しらずしらずに道にかなふなり。是いはゆる百姓日用而不レ知なり」と言う。
- (11) 不 名詞を否定するのに「不」を使うことは一般的ではないが、『中庸』に「苟不至徳」の用例がある。「無」（や「非」）では百パーセントの否定になると思ったからであろうか。
- (12) 大学、小学 ここでは「教」として「大学」「小学」だけが書かれているが、蘭洲は「教」を、「聖賢の教え（直接の教授）」「天地万物の様子を見て我が身を省みること（自省）」「書物や伝聞で古人の嘉言善行を知りそれに習うこと（書物）」「悪い例を見て自己反省する（反面教師）」「人主が礼楽刑政で人民を教化すること（人民教化）」とより多角的に考えていた（蘭洲『中庸首章解』13a）。
- (13) 中和 『中庸』第一章に「喜怒哀楽之未発謂之中、発而皆中節謂之和。中也者天下之大本也、和也者天下之達道也。致中和、天地位焉、萬物育焉」とある。
- (14) 生知安行 『中庸』第二十章に「或生而知之、或学而知之、或困而知之。及其知之之一也。或安而行之、或利而行之、或勉强而行之。及其成功一也」とある。「生而知之」という語は『論語』述而篇、季氏篇にも見える。
- (15) 舜有天下而不与焉 『論語』泰伯篇に見える。
- (16) 詩 『詩経』小雅・巧言に「他人有心、予忖度之」とある。

【キーワード】

・五井蘭洲

・『中庸』天命性図

・懷徳堂

・『中庸』

・太極図